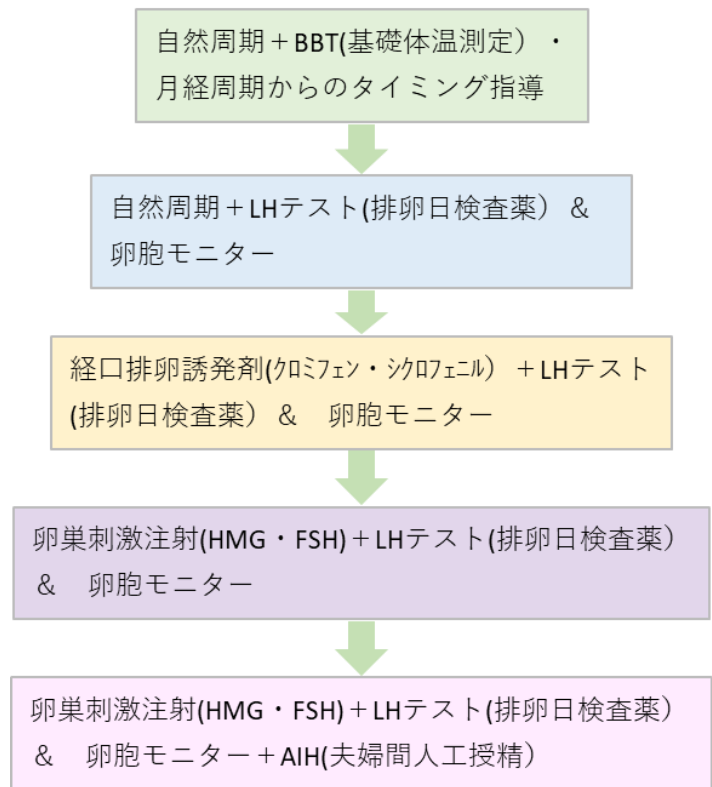


## 不妊治療を継続することの大切さと難しさ

妊娠を希望し少し敷居の高い不妊治療を始めてみたものの、月に1回しかないチャンスに向けて薬を飲んだり注射をしたり卵胞モニターをしたりしてタイミングを計り、毎月頑張っても生理が来ては落胆し、周囲の眼や友人・知人の懐妊のうわさを聞けば心乱れ、自分の頑張りが空回りしている気さえる…。不妊治療を経験した方は皆さんこんな気持ちを抱かれたことがおありだと思います。ゴールが見えないマラソンは、時として息切れしリタイアしたくなります。1年間の不妊治療の統計を毎年取っていると、多くの喜びの一方で、リタイアした方達も少なからずあり、その原因について少し考察したいと思います。

一般不妊治療での妊娠率は継続期間が半年以内で19%、1年で30%、1年半で36%、2年で43%と報告され、妊娠には治療の継続が必要なこととは言ってもありません。当院では、ホルモン検査や卵管疎通性検査（通気・通水テストや子宮卵管造影）・フーナーテスト（性交後試験）・精液検査を進めながら、まず卵胞モニター・LHテスト（排卵日検査薬）によるタイミング療法を3周期行い、妊娠に至らなかった方や元々排卵障害のあった方には、経口排卵誘発剤であるシクロフェニール（商品名セキソビット）やクロミフェン（商品名クロミッド）併用での卵胞モニター・LHテストによるタイミング療法にstep upし3周期行っています。それでも妊娠に至らなかったり、クロミフェンでは十分な卵胞の発育が見られなかった方には卵巣刺激注射（HMGやFSH）にstep upし3周期施行。それでも妊娠に至らなければ、卵巣刺激注射に加えてAIHを5～6周期併用するstep up療法を行っています。（図1）その結果、この3年間で平成29年173例中108例（妊娠率62.4%）、30年173例中102例（59.0%）、31年から令和1年188例中105例（55.9%）が妊娠に至っており、治療の継続とstep upの重要性を再認識しています。しかし、妊娠という成果が得られないままリタイアされる方も毎

治療進捗図1



年少なからずおられます。今回、平成 31 年の 1 年間について、リタイヤされた方々についての検討をしてみました。

1. 自然周期でのタイミング療法を 3 周期以上施行後リタイヤされた方は 2 名おられ、2 名とも経産婦でした。
2. 経口排卵誘発剤に step up し 3 周期以上施行したのちにリタイヤされた方は 18 名、そのうち 8 名が経産婦で、残り 10 名に関しては、
  - ① 卵巣の問題：卵巣腫瘍・多嚢胞性卵巣症候群（PCOS）や卵巣予備能低下による排卵障害。
  - ② 男性側の問題：検査や治療への夫の協力が得られない。
  - ③ 子宮内腔の問題：子宮内膜ポリープ等 ① ～③ 7 名でした。
3. 経口排卵誘発剤後、卵巣刺激注射に step up された方は現在も、治療中の方が大半ですが、途中でリタイヤされた方が 8 名おられました。4 名が経産婦で、2 名は卵巣刺激注射でも成熟卵胞が得られず高度生殖医療適応です。

以上から、それぞれの step においてリタイヤされた方は、既にお子様のおられる経産婦が多く、お子様を抱えての通院の大変さや治療のしんどさからリタイヤの選択をされたのも無理からぬことかと推察しました。しかし、全般的にはご夫婦で根気強く治療の継続と step up により、約 6 割の方々が妊娠というゴールに到達されています。しかし、経口排卵誘発剤に step up 後も 3 周期未満で中断されたり、卵巣刺激注射へ step up されなかった方が 36 名おられ、またカウンセリングや血液検査だけを受けられその後一度も受診されなかった方やタイミング療法が 1～2 周期のみの方も 59 名おられました。最初にも申しましたが、当院では極力身体にもそして費用面でも負担の少ない治療から開始しますので、月に 1 回しかないチャンスにまずタイミング療法から始めることの「じれったさ」を感じられる方も多いと思います。しかし、今までの自己流ではタイミングが意外とズレていたり、卵胞モニターや LH テストによりタイミングを上手く取るだけで妊娠につながることも数多く経験しております。その後の不妊療法といえば薬を飲んだり、注射を沢山打つというイメージを抱きがちですが、これも毎月のチャンスを出来るだけ良好な状態で迎えるための手段と思い、one step 毎に納得しながら step up していただけるよう、丁寧な説明の必要性を再認識いたしました。不妊治療の内容は最初は難しく感じます。知らない用語が沢山出てきますので、理解しにくいことがあれば、何なりとご質問ください。何度でも繰り返しご説明させていただきます。患者様の心情に寄り添いながら、モチベーションを維持して頂けるよう工夫することの大切さを、今回の検討を通して改めて実感いたしました。

